

## 注

- (1) Harry K. Wells, *Pragmatism: Philosophy of Imperialism*, (New York: International Publishers, 1954), pp.77-98. (山田英世、長田五郎訳『プラグマティズム』理論社、1956年、123-156頁)。船山謙次著『戦後日本教育論争史』東洋館出版社、1963年、100-120頁。
- (2) J. Dewey, *Experience and Education*, LW13, p.9. (市村尚久訳『経験と教育』講談社学術文庫、2004年参照)。
- (3) *ibid.*, p.39.
- (4) *ibid.*, pp.39-41.
- (5) J. Dewey, *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology*, MW14, p.214. (河村望訳『人間性と行為』デューイ＝ミード著作集、人間の科学社、1995年参照)。
- (6) J. Dewey, *Experience and Education*, p.41.
- (7) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, p.172.
- (8) *ibid.*, p.175.
- (9) J. Dewey, *How We Think: A Restatement of the Relation of Reflective Thinking to the Educative Process*, LW8, pp.229-230. (植田清次訳『思考の方法』春秋社、1950年参照)。
- (10) J. Dewey, *The School and Society*, MW1, p.32. (市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社学術文庫、1998年参照)。
- (11) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, p.209.
- (12) *ibid.*, p.215.
- (13) J. Dewey, *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, MW9, pp.165-166. (金丸弘幸訳『民主主義と教育』玉川大学出版部、1997年参照)。
- (14) *ibid.*, p.166.
- (15) J. Dewey, *The School and Society*, p.36.
- (16) *ibid.*, p.36.
- (17) *ibid.*, p.36.

- (18) J. Dewey, *Art as Experience*, LW10, p.66. (河村望訳『経験としての芸術』デューイ＝ミード著作集、人間の科学社、2003年参照)。
- (19) *ibid.*, p.101.
- (20) J. Dewey, "The Future of Liberalism", LW11, p.295. (杉浦宏・田浦武雄編訳『人間の問題』明治図書、1976年参照)。
- (21) 宮野安治著『教育関係論の研究』溪水社、1996年、8頁。「教育関係」という用語それ自体は、ノールの1914年の論文にみられるという。また、「教育関係」論者の内部から、不十分さが指摘されている。たとえば、教師 生徒という一対一の関係に限定され、関係が孤立化されてしまうこと、人格に優位性が強調されることが、教授場面での事物関係の重要性に目を閉ざすことになること、そして教師への過度の要求、などである(128-146頁)。現在は、「教育的相互作用」概念を用いて新たな議論の試みがなされているという。
- (22) たとえば、次の著書がある。宮澤康人著『大人と子供の関係史序説 教育学と歴史的方法』柏書房、1998年。
- (23) 高橋勝、広瀬俊雄編著『教育関係の現在 「関係」から解読する人間形成』川島書店、2004年。
- (24) 『デューイ研究』の単著をもつ田浦武雄は、1986年、論文「教育的人間関係の研究」を発表している。(『教育哲学研究』第54号、1986年、1-14頁)。田浦は、セオードル・B・H・ブラメルド(Theodore Burghard Hurt Brameld)の言説から文化的志向と実存的志向の二つの指標を取り出し、ドイツ以外のアメリカの研究者、フィリップ・W・ジャクソン(Philip W. Jackson)やローレンス・コールバーグ(Lawrence Kohlberg)、また、ジョージ・H・ミード(George Herbert Mead)、フィリップ・H・フェニックス(Philip Henry Phenix)などに言及するも、デューイを考察の対象として取りあげていない。
- (25) 宮澤は、デューイの教育論について次のように懸念を示している。「しかし、この転換（子供そのものをまず認識することから出発するべきという教育学）がもたらしたのは、教育主体から学習主体＝子供への中心の移行であって、両者の関係への注目ではなかったのではあるまいか」（括弧内論者）。（『子供と大人の関係史序説』18頁）。
- (26) 鶴間規文「教育関係の新展開」、市村尚久、天野正治、増淵幸男編『教育関係の再構築 現代教育の新構想を求めて』東信堂、1996年、258-260頁。
- (27) G. J. J. Biesta, "Pragmatism as a Pedagogy of Communicative Action", *The New*

- Scholarship on Dewey*, edited by Jim Garrison, (Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1995), pp.273-290.
- (28)J. Dewey, *Democracy and Education*, p.167.
- (29)J. Lock, *Some Thoughts Concerning Education*, (London: A. and J. Churchill at the Black Swan in Pater, 1693), p.186.
- (30)Clifton Johnson, *Old Times Schools and School Books*, (New York: The Macmillan Company, 1917), p.26. ホーン・ブックについては、次の研究書があり、レプリカがついている。Andrew W. Tuer, *History of the Horn-Book*, (Amsterdam: S. Emmering, 1971).
- (31)Samuel Chester Parker, *A Textbook in the History of Modern Elementary Education: with Emphasis on School Practice in Relation to Social Condition*, (Boston: Gin and Company, 1912), p.73.
- (32)C. Johnson, *Old Times Schools and School Books*, p.80.
- (33)宇佐美寛「教育におけるピューリタニズムと『左翼』プロテスタンティズム」梅根悟監修『世界教育史体系 17 アメリカ教育史』講談社、1975 年、275 頁。
- (34)Cotton Mather, “On the Education of Children” (first published 1706), *Education in the United States: A Documentary History, vol.1*, (New York: Random House, 1974), p.409.
- (35)市村尚久「アメリカにおける人間形成思想の伝統と革新」長井和雄、小林政吉、市村尚久著『人間形成の近代思想』第一法規出版、1983 年、135 頁。
- (36)N. Webster, *The Elementary Spelling Book*, (New York: D. Appleton & Co., 1866), p.20.
- (37)N. Webster, “Federal Catechism” (first published 1798), “Moral Catechism” (first published 1798), *Education in the United States, vol.1*, pp. 769-773.
- (38)C. Johnson, *Old Times Schools and School Books*, pp.167-184. S. C. Parker, *The Textbook of the History of Modern Elementary Education*, pp.80-83.
- (39)市村尚久「アメリカにおける人間形成思想の伝統と革新」, 153-154 頁。
- (40)J. Dewey, *Experience and Education*, pp.4-5.
- (41)N. Webster, “On the Education of Youth in America” (first published 1790), *Essay on Education in the Early Republic*, [Cambridge: The Belknap Press of Harvard

University Press, 1965], p.45.) ウェブスターは、アメリカ国家の性格は、未だ形づくられていないとして、若者に、徳と自由の原則や、国家に対する愛着を教えることを教育の目的と考えた。アメリカ言語の統一も、『ブルー・バック・スペラー』の出版も、ヨーロッパから独立したアメリカ国民養成の意図が含まれていた。

(42)村山英雄著『オスウィーゴ 運動の研究』風間書房、1978 年、115-129 頁。

(43)たとえば、「私は、直観をあらゆる認識の絶対的な基礎として認めることによって、教授の至高至上の原理を確立した」という文がある。（ペスタロッチー著、長尾十三二、福田弘訳『ゲルトルト児童教育法』明治図書、1976 年、163 頁）

(44)村山英雄著『オスウィーゴ運動の研究』244 頁。

(45)J. Dewey, *Democracy and Education*, p.278.

(46)ibid., p.276.

(47)ibid., pp.206-207.

(48)村山英雄著『オスウィーゴ運動の研究』251 頁。

(49)前掲書、258 頁。「実物教授法」が機械的であることへの非難は、1862 年には、早くもヘンリー・B・ウィルバー(Henry B. Wilber)によってなされた。しかし、この批判は逆に実物教授法を全米に宣伝する契機になったという。同年に発表されたシェルドンによる数の授業の進め方によると、3 という数を教えるためには、「二本の鉛筆」や「二冊の本」というように徹底的に 2 の数を理解させ、鉛筆や本を一つ加えて 3 という数を教え、別のものにも 3 という数が当てはまることを発見させ、更に別のもので、3 という数を理解しているかどうかを確かめる、とある。（“An “Object” Lesson on Number” (first published 1862), *Education in the United States, volume 3*, pp.1786-1787.)

(50)上野辰美著『アメリカ幼稚園教育の公教育性発展過程に関する研究』風間書房、1995 年、38、80 頁。阿部真美子「1850 年代から 70 年代の幼稚園運動におけるドイツ人移民の果たした役割」、滝沢和彦「公立幼稚園の発達 W・T・ハリスと S・ブロー」、阿部真美子・別府愛他、キルパトリック他『アメリカの幼稚園運動』明治図書、1988 年、11-24、25-35 頁。

(51)津守真・久保いと・本田和子著『幼稚園の歴史』恒星社、1959 年、157-162 頁。

(52)J. Dewey, *The School and Society, MW1*, p.82.

(53)ibid., p.83.

(54) *ibid.*, p.84.

(55) J. Dewey, *Democracy and Education*, pp.62-63. フレーベルの遊びが、内的な法則性と結びついていることは、次の文に確認できる。「遊びは、自然のごとく、それにおいてまたそれをつうじて遊びが進行する永遠の法則を示すが、それはこの法則の断片的な死せる認識のためではなくて、法則からあらわれ、いわば法則をつうじてうみだされかつそこからうまれる生命のためである」。したがって、単なる享樂は遊びとはならず、「正しく認識され正しく育てられた遊び」が必要であり、恩物は、そのために開発された。（フレーベル著、岩崎次男訳『幼児教育論』明治図書、1972年、57-61頁）。フレーベルの幼稚園は、恩物が有名となった故に、そのみがなされていたという感が先行してしまう傾向があるが、草花や野菜を育て観察させる活動もなされ、全ての階級の子弟のものであったことは、フレーベルの名誉のためにも付言しておきたいことである。

(56) *ibid.*, p.63.

(57) J. Dewey, "The Kindergarten and Child-Study", *EW5*, p.208.

(58) 小笠原道雄著『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年、239頁。

(59) 上野辰美著『アメリカ幼稚園教育の公教育性発展過程に関する研究』180-171頁。

(60) 松浦鶴造著『モンテッソーリ教育の研究』五月書房、1986年、9-26頁。

(61) J. Dewey, *Schools of To-Morrow*, *MW8*, pp.300-309. 河村望訳『明日の学校・子どもとカリキュラム』デューイ＝ミード著作集、人間の科学社、2000年参照）

(62) J. Dewey, *Democracy and Education*, p.205.

(63) *ibid.*, p.160.

(64) J. Dewey, *The School and Society*, p.52.

(65) J. Dewey, *Democracy and Education*, p.160.

(66) J. Dewey, "The Child and the Curriculum", *MW2*, p.281. (市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社学術文庫、1998年参照）

(67) J. Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*, *LW12*, p.47. (魚津郁夫訳『論理学 探究の理論』世界の名著 48、中央公論社、1968年参照）

(68) J. Dewey, *Experience and Education*, p.6.

(69) J. Dewey, *The School and Society*, p.98.

(70) J. Dewey, "The Place of Manual Training in the Elementary Course of Study", *MW1*, p.235.

- (71)ibid., p 237.
- (72)J. Dewey, *The School and Society*, p.12.
- (73)J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, pp.21-25.
- (74)ibid., pp.69-70.
- (75)ibid., p.32.
- (76)ibid., p.75.
- (77)稲垣良典著『習慣の哲学』創文社、1981年、225頁。
- (78)谷口忠顕著『デューイの知識論』九州大学出版会、1991年、293-314頁。
- (79)稲垣良典著『習慣の哲学』、201-211頁。
- (80)谷口忠顕著『デューイの知識論』、313頁。
- (81)教育の視点からアプローチしたエマソンの思想に関する研究は、次の著書が参考になる。市村尚久著『エマソンとその時代』玉川大学出版部、1994年。
- (82)J. Dewey, *Democracy and Education*, pp.56-57. (エマソンの文に関しては、金丸弘幸訳『民主主義と教育』、97頁をそのまま使用。)
- (83)R. W. Emerson, “Education”, edited by AMS Press, *Lectures and Biographical Sketches, vol.10, Ralph Waldo Emerson*, (New York: AMS Press, 1968), pp.125-159.  
(市村尚久訳「教育論」『人間教育論』明治図書、1971年参照)。
- (84)R. W. Emerson, “Self-Reliance”, *Essays and Poems by Ralph Waldo Emerson*, (New York: Barnes & Noble Classics, 2005), pp.113-135. (市村尚久訳「自己信頼」『人間教育論』明治図書、1971年参照)。
- (85)市村尚久著『エマソンとその時代』、109頁。
- (86)R. W. Emerson, “Education”, p.144.
- (87)市村尚久「超越主義経験論『直観』の論理 デューイのエマソン理解を軸として」  
市村尚久・早川操・松浦良充・広石英記編著『経験の意味世界をひらく 教育にとって経験とは何か』東信堂、2003年、15頁。
- (88)J. Dewey, “Emerson: The Philosopher of Democracy”, *MW3*, p.189.
- (89)J. Dewey, *Individualism, Old and New, LW5*, p.122.(鶴見和子訳「新旧個人主義」『世界大思想全集・デューイ』河出書房、1960年参照)。
- (90)斎藤直子によると、デューイにエマソンのモチーフや、エマソンのロマン主義を認め、評価する研究がある一方で、エマソンからの恩恵をデューイが受けていることを否定は

しないが、エマソンとの関連性を唱える研究に対して批判的立場もあるという。彼女は、後者の立場に立つスタンリー・カベル(Stanley Cavell) との対話をとおして、デューイの再解釈を試みている。（『＜内なる光＞と教育 プラグマティズムの再構築』法政大学出版局、2009 年）。